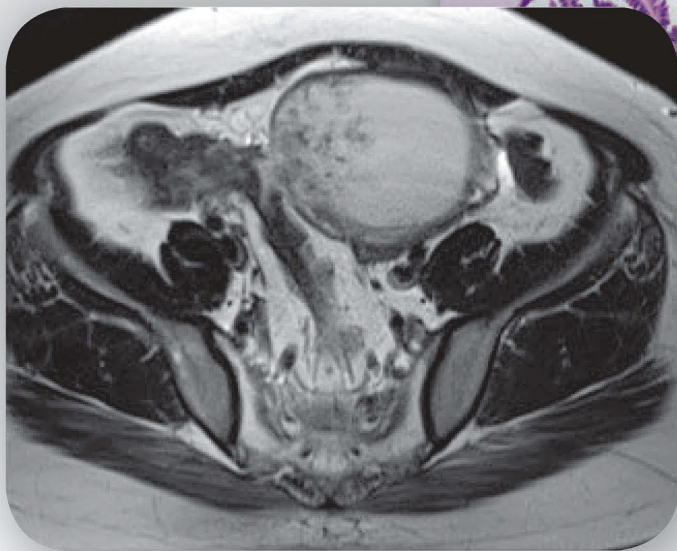
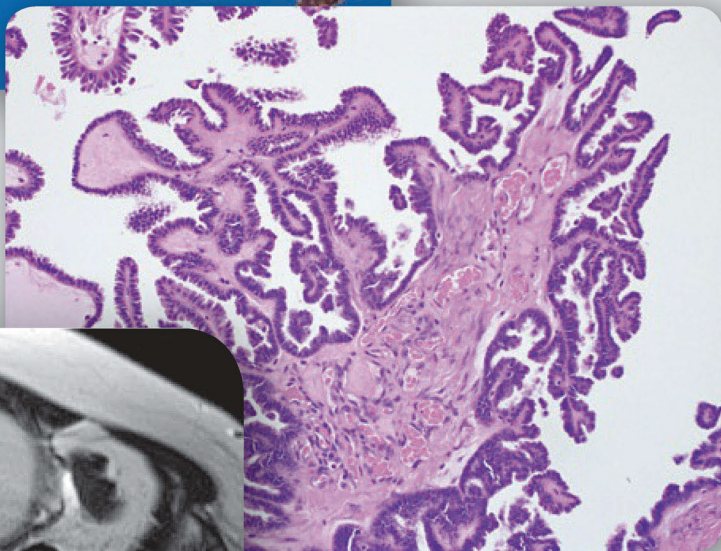
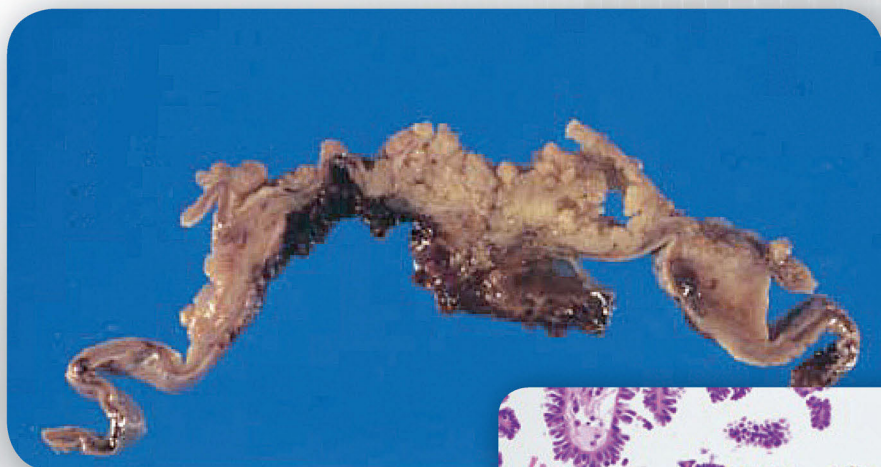


特 集

肉眼から迫る



(写真：p313, 321より)

病理と画像

序説

第37回日本画像医学会(2018年2月23・24日)の臓器別シンポジウムでは、肝、腎、卵巣、軟部腫瘍の4つの領域において、画像と肉眼像との対比に注目した企画が行われ(「卵巣腫瘍に肉眼から迫る」「腎腫瘍に肉眼から迫る」「肝結節に肉眼から迫る」「軟部腫瘍に肉眼から迫る」)、臨床医、病理医、画像診断医による発表、ディスカッションが行われた。現在の診療では、画像診断、病理診断が不可欠となっており、臨床医、病理医、画像診断医の協力が必要であり、放射線科医、病理医にとって、大変有益なシンポジウムだったと感じた。

自分の専門でもある骨軟部領域では、古くから「Jaffe's triangle」というものがある。これは、1958年に病理医であるHenry L. Jaffe教授によって書かれた教科書の冒頭に出てくる表現であるが、「整形外科医、病理医、放射線診断医の三者が共同して骨腫瘍の診断・治療を行わなければならない」という考え方である。当然、ほかの領域でも三者の協力が不可欠であり、画像診断医が画像の評価をする際に、肉眼所見や臨床情報が診断に大いに役立つように、病理診断でも肉眼所見や画像所見を踏まえたうえで、組織の切り出しを行ったり、画像診断を参考に病理診断を行うこともあるとのことである。

今回の企画は、肝、腎、卵巣、軟部腫瘍の4領域を取り上げているが、肉眼所見と病理、画像との関係を各々その領域で活躍されている専門家の先生にそれぞれ解説していただいた。肝では病理を原田憲一先生、画像を小坂一斗先生らに、主に肝悪性腫瘍を中心に解説していただいた。腎腫瘍は病理を都築豊徳先生ら、画像を立入哲也先生らに、腎癌とその亜型や良性の血管筋脂肪腫などについて解説していただいた。卵巣腫瘍については病理を九島巳樹先生、画像を宗近次朗先生に、2014年のWHO分類を基に解説していただいた。軟部腫瘍は反応層を伴う粘液線維肉腫などを中心に、腫瘍の辺縁の評価を含め、病理を加藤生真先生にお願いし、画像は常陸が担当させていただいた。

この企画が日常診療の一助となれば幸いである。

常陸 真